

少年刑務所での内観実践の共同研究から『社会問題の構築』の日本版へ【改訂版】¹

関西大学総合情報学部 中河 伸俊

nobunaka@res.kutc.kansai-u.ac.jp

0. はじめに

- ・ 2003年に80歳で死去したジョン・キツセは、晩年に過去を振り返って、「私の学問的キャリアは、主流の機能主義、とりわけマートン学派のそれ²に対する挑戦を通じて築かれた」と述べた（2002年8月のアメリカ社会問題学会大会の、キツセの功績を顕彰する理論部会主催のシンポジウムでのスピーチより）；その挑戦とは、具体的にいえば、1960年代に逸脱の社会学の分野でラベリング（レイベリング）論の主唱者の一人になったこと、そして70年代に、実証主義者（ゴーヴら）および左派（コンフリクト論者や「新犯罪学」派）から挟み撃ちの批判を受けて退潮したラベリング論の、いわば再チャレンジといえる形で、社会問題の社会学における構築主義アプローチの確立に先導的な役割を果たしたことを指す
- ・ 以上は、社会学史（とくに逸脱と社会問題の研究史）の文脈の中では適切な総括だろうが、キツセという人が歩んだ道とその人となりを回顧するには不十分；

“文化の melting pot” カリフォルニア出身の日系二世（silent Nisei!）であり、青春に強制収容所（internment camp）を経験したこと；GIビルでUCLAに入り、ネオシカゴ学派（SI）と草創期のEMの影響下にUCLAで社会学を学んだこと（だから友人のベッカーとは反対に研究者として世に出たのは遅い）；デビュー作は師のブルームによる収容所後の日系人家族の聞き取り調査であること（Broom and Kitsuse, 1956）；そして、彼にとってある意味で「日本文化」の icon だったとあっていいだろう年少の友、山村賢明氏との生涯にわたる交友といった諸点は、研究者としてのキツセの人生の回顧にとって欠かせないはず

※末尾に、キツセの簡単な年譜をまとめたので、詳しくはそちらをご参照ください

★没後16年ときりの悪いタイミングの今回の企画は、キャリアの終わりが見える時期に辿り着いた報告者にとって、これまでじつは先送りにしてきた恩ある人への内心での追悼と供養、どうかわが我が儘にお付き合いのほどを

¹ これはこの日の他の報告者やフロアの皆さんとの意見交換を踏まえて、加筆訂正した改訂版の第2版である（19-11-17に最終訂正）。当日の報告者と報告タイトルは、巻末に付した。

² 最近では再訪する人も少なくなく遺跡化していそうだが、「アノミー論」という形で機能主義の枠組みの中に階級の問題を取り入れたマートン派（コーエン、クロワード&オーリンと続いた）の出発点となった綱領的文書（Merton, 1957=1961）は、リベラリズムの政策提言のバックボーンとして、民主党政権の時代の米国で一時代を築いた。

1. フルブライト研究員と内観の研究³

- ・ キツセはシカゴのノースウェスタン大学の Assistant Professor だった 1961 年 10 月から 62 年 8 月にかけて、フルブライトの Japan Research Scholar として東京教育大学に派遣されている⁴；この期間中に当時博士課程に在籍した山村（63 年 3 月に同大学大学院を単位取得退学）との共同研究の企画が固まり（山村が RA=リサーチアシスタントとして雇用されたという可能性も高い）、二人の奈良県の少年刑務所での共同調査の主要な部分が行われたのはたしかだろう（訪日の開始時点でキツセが 38、山村が 28 という年齢好だった）

★日本へ来たとき、キツセはすでに、帰国後ほどなく刊行されることになるシクレルとの進路指導の調査研究（Cicourel and Kitsuse 1963; その経緯は Cicourel 2009 に詳しい）のかなりの部分を終えていただろうし、また、ラベリング論の基礎文献の一つ「逸脱行動への反作用」（1962）を投稿済みだったはずである⁵

- ・ この共同研究の研究対象は、1955 年に奈良の少年刑務所で開始されて他刑務所に広まった、受刑者の更生のための仏教思想を背景に持つ内観法⁶であり、その研究成果は、「現代日本における個人的責任の意識」として『社会学評論』誌上に発表された（キッ

³ 以下の、(学術的業績についてはかなり不正確な) ロサンジェルスタイムズ紙の訃報でも、フルブライトでの日本派遣と内観研究についてはスペースを割いて紹介されている。「John I. Kitsuse, 80, a sociologist at UC Santa Cruz known for his theories on deviant behavior and crime, died Nov. 27 at his home in Santa Cruz of complications from a stroke suffered the previous day. /Educated at Boston University and UCLA, Kitsuse taught at the University of Washington, San Diego State and Northwestern University before joining the UC Santa Cruz faculty in 1974. He retired in 1991. His best-known textbook, which he co-wrote with Malcolm Spector, was “Constructing Social Problems.” /From his period as a Fulbright scholar in Japan, Kitsuse maintained a strong professional relationship with the Japanese. He became expert in a method of prisoner rehabilitation called naikan, which requires inmates to reflect on the shame their crimes have brought to family members, and introduced the method to U.S. scholars. /Kitsuse also wrote widely about sexual harassment in the workplace, serial murder and how to understand the development and perception of social problems. /The professor served as president of the Society for the Study of Social Problems from 1978 to 1979 and at UC Santa Cruz served stints as vice chairman of its Academic Senate and as chairman of the sociology department. (John I. Kitsuse, 80; *Sociology Professor at UC Santa Cruz*, *Los Angeles Times*, Dec. 10, 2003)」

⁴ *Fulbright Scholars Directory* - University of Arkansas Libraries
<https://libraries.uark.edu/specialcollections/fulbrightdirectories/1961%20-%201962.pdf> で確認できる。

⁵ キツセは、自分やベッカーらの逸脱についての「反作用的定義アプローチ」（彼はいわゆるラベリング論を一貫してこう呼んだ）の立場にたつ論文は、マートン派が優勢な主流のジャーナル（*AJS*や*ASR*?）で軒並みリジェクトされ、比較的歴史の浅い *Social Problems* 誌でアクセプトされたと言っていた。（ちなみに、ハワード・ベッカーが同誌の当時のエディターだった。『社会問題』誌がラベリング論と社会問題の構築主義を世に出すのに果たした役割については、スペクターの回顧を参照のこと（Spector 1976））。

⁶ 内観法については、浄土真宗木辺派の僧侶であり、1941 に独自の「身調べ」の方法を確立した創唱者吉本伊信本人の著作（1989; 2007）をはじめ、多くの入門書や研究書がある。

セ、山村 1963)

キツセについていえば、当然、ラベリング論とこの調査研究との位置関係が気になるところ； いっぽう、山村についていえば、この調査の成果が、のちの『日本人と母』にどのように生かされたかが見所となる(山村 1971 第3章3「非行少年における母の分析」) ラベリング論の文脈からいえば、非行少年や犯罪者の処遇と社会復帰をめぐるのは、spoiled identity をどう修理し、どう脱ラベリング化をはかるかという、レッテルを貼る「他者」や「社会」の側に目を向けた論理構成が自然な順路となるが⁷、この内観研究の焦点はそちらにではなく、受刑者個人が自身の罪についての責任をどのようにして自覚し、他者に対する姿勢を変えていくかというところにある(その意味では、今世紀になって米国で広がり始めた「犯罪キャリアからのデジスタンス」⁸ についての研究関心を、もう一歩進めたようなものといえるかもしれない)

○調査の手順： 少年刑務所の受刑者で希望して内観法を受け、「先生」の指導のもと「六日ないしは十日間、独居房(個室)にほとんど孤立の状態に入って」(キッセ、山村 1963: 82) 自己反省を行った者 70 人を、開始時点・中途・進んだ時点の各 3 回ずつインタビュー

○内観法の手順： ①これまでの人生における他者との関係を振り返って「調べ」という個人的な内省=内観を通じて、自分がひとりで生きていたわけではなく他者に依存し他者に負債を追って生きてきたことを理解する⁹； ②「うらみ⇒ぐれる」仮説(同 84) にそって、内観者に自身のうらみを自覚させ、自分が間違っていた(=咎の責任はうらむ相手にではなくその人をうらんだ自分にある)という形で個人責任を引き受けさせ、告白と懺悔をさせる； ③「我」を通すことをやめて「無我」になり、重要な他者(父、母、きょうだい、先生など)の「おかげ」や「恩」を appreciate して、「生きる喜び」を導き出す

「この方法が自己(self)についてのことさら日本的な考え方と、自己に意味と価値を与える社会に対する自己の特定の関係を具現しているということは明らかである」(同 86)¹⁰

⁷ たとえば、村上(1979)。

⁸ たとえば、Whiteford(2007)。

⁹ はっきりいって、これは、その実践的な落としどころはさておき、「社会的」には、とても相互作用論的な世界(社会)観だ。構造機能主義者のマートンでさえ「巨人たちの肩の上で」と謙譲なことをいっているのに、インターアクションリストやエスノメソドロジストを自認しつつ、業績や研究その他をめぐる個人主義的な「我」を張る言動をする人たちがいるのに、あきれざるを得ない(いくらアカデミアの制度的編成が個人主義原理で動いているからといって、EMかSIかフーコーをちょっと齧れば、そんな「我」は本来的じゃないってわかるはず)。そういうこととは無縁だったというのが、私がキツセに私淑する大きな理由の一つだ。

¹⁰ キッセ・山村論文には、「日本では敬意や品行に関する表現にこまかな配慮が払われるが・・・」というくだりがある(p.81)。参照文献として示されていないが、キツセがここでゴフマンの初期の論文「The Nature of Deference and Demeanor」(1956)を念頭においていたことはたしかだと思われる。キツセは、ゴフマンについて中河に、①くねくねと曲がってねじくれた独特

★内観は社会（学）的方法であり、個人的指向が強い米国において心理（学）的方法が優勢なのと対照的（同 82）；それが有効になるためのリソースは日本文化に固有の「常識と良心」（社会変動の結果第一次社会化に埋めこまれたその基盤が失われれば、有効性を失うだろう）

★★内観法には固有の動機の語彙があり（ミルズ！）、それが「幼少時の社会化に含まれていた価値を呼び戻して現状を再解釈させることによって〔内観を経験した受刑者を〕既存の社会に再統合させる」（同 88）

- ・ この共同研究は、ミード系統の自己論（I と ME の自省的コミュニケーション etc.）と土居健郎流の日本文化論（互酬性と「甘え」 etc.）¹¹ を接ぎ木したような作風であり、逸脱研究の革新におけるベッカーよりさらに徹底した社会的反作用一元論者のキツセとは、別の相貌を私たちに見せてくれる（なお、キツセが一人で執筆した英語の内観についての「プシコロギア」論文(Kitsuse 1965)とこの「評論」論文の異同については、報告者の怠慢のため未確認）

内観法はその後、内観療法として刑務所よりもむしろ病院（精神医療やカウンセリング）において成功を収め、海外にも進出、1990年代には内観国際会議が開催されるようになる；「日本文化」への強い（そしてたぶんアンビバレントな）関心から内観にアプローチしたであろうキツセは、そうした展開をつぶさに認識したときどう思ったのだろうか（略年譜に記したように、彼は90年代にもう一度内観について調査しようと試みている）

2. 『社会問題の構築』日本語版刊行の過程

- ・ 五年前の『だれが進学を決定するか』の邦訳の場合と同じく、『構築』日本語版刊行のプロジェクトは、キツセの交友ラインから始まった；キツセの UCSC の博士課程の指導院生で TA や RA を勤め、何度も一緒に日本を旅した森俊太の手で一通りの試訳が作られたあと、キツセは山村に邦訳刊行の相談をした（著作権はキツセ自身が管理していた）

それよりだいぶ前（『だれが進学を決定するか』の邦訳プロジェクト以前=80年代初め？）に、山村は、自身の修士の指導院生だった北澤毅に、『構築』の経験的調査の章を示して、この本の翻訳に興味はないかと遠回しの打診をしたとのこと；北澤が結局積極的な答えをしなかったため、邦訳刊行に熱心なキツセの意向を受けた山村は、学界内で評

の文体で書く、しかし、②ゴフマンの仕事は、米国人よりも日本人のほうがわかりやすいかもしれないと、語ったことがある。また、どういうきっかけからだかわからないが、キツセはゴフマンと面識があった。森俊太に、「ゴフマンはパーティの場に入ってくると、まず座って（やりとりの輪に入らず）そこで人びとがやっていることをじっと観察する。私も、彼のまねをして観察するんだ」といっていたという（この点については、p.12の★の項も参照のこと）。

¹¹ 精神医学者の土居の「甘え」論が発表されはじめたのは、1950年代半ばである（ex. 土居 1956）。なお、山村は社会学者青井和夫の下にいたことがあり、家族と日本文化への関心は、青井の影響下でのものである可能性もある。

価が高かった『逸脱の社会学』（1979）の共著者で、ラベリング論紹介の第一人者でもあった宝月誠¹² にコンタクトをとった（かりに上記の時点に北澤が前向きの返事をしていたら、『構築』はより早い時期に、山村賢明・北澤毅訳で出版されていたかもしれない）

- ・ 山村にコンタクトされた宝月も、諸般の事情からこの翻訳プロジェクトに自身では関われないと判断、ただし、山村／キツセサイドから森の試訳を携えての働きかけが強かったこともあり、ベッカーの『アウトサイダーズ』の邦訳（Becker 1963=1978）を出しており、学部（京都大学教育学部）の後輩でもある村上直之（神戸女学院大）に、このプロジェクトの話を持ちかけた； 村上も、当初は必ずしも積極的ではなかったが、手伝ってくれる若手を二人推薦する（当時金城学院大にいた鮎川潤と富山大にいた中河のこと）¹³ という宝月の説得を受けて、三人の翻訳チームが立ち上がることになった¹⁴（1980年代半ばのことだったと思う）

チームができたあと、キツセはほとんど毎年のように来日し、そのたびに訳者チームと会って訳業の進行を督促； ことばの面の事情で彼との面談のメインの受け手になった中河は、大いにプレッシャーを感じて作業のまとめ役（手紙や電話とワープロ原稿の時代だった）を買って出るとともに、『構築』の中身とキツセとの会話のサンドウィッチで構築主義の“折伏”を受け、最終的には、訳書のプロモーションのため紀要論文を書いて配ろうと思うまでに宗旨替えした； なお、版元については、山村が“若いがいっかりした人がやっている出版社”が引き受けてくれたとして、ハーベスト社を宝月に提示したが（小林達也さんのご冥福を祈ります…）、村上の発案で『アウトサイダーズ』を担当した新泉社の編集者が独立して起こしたマルジュ社に変わった¹⁵

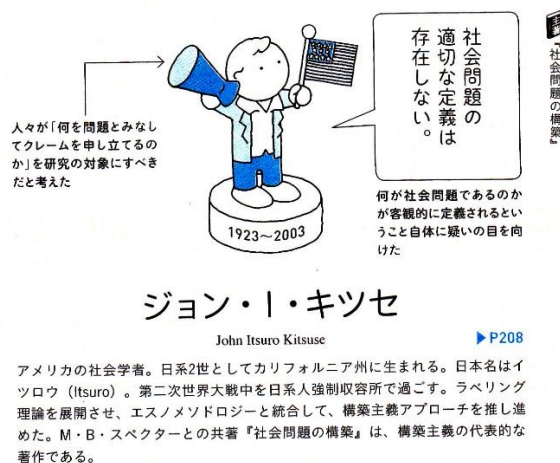
¹² 本年の9月30日に宝月先生のお宅にお邪魔し、邦訳プロジェクトの背景事情についていろいろうかがった。そのときの話によれば、この翻訳プロジェクトについて相談を受けるより前に、山村、キツセ、森が京都を訪れ、四人でホテルのレストランで会食したことがあったという。宝月によるラベリング論のすぐれた紹介作業によって土壌が耕されていなければ（のちに「社会問題のワーク」研究の先駆として位置付けられることになるシクレルやエマーソンの少年司法過程のフィールド調査を最初に日本に紹介したのも宝月である、宝月は日本版刊行以降の時期に、シクレルが教鞭をとるカリフォルニア大学サンディエゴ校で在外研究をしている）、社会問題への構築主義アプローチがこの国に根付くにはもっと手間暇がかかっただろう。

¹³ 宝月は以前（大阪府立大時代）から鮎川・中河と、「病理の思想研究会」という逸脱研究系統の勉強会のメンバーとして面識があった。ちなみに、この会の他のメンバーは、仲村祥一、大村英昭、加藤春恵子、井上真理子だったと記憶する（個人的な話になるが、この会で知り合った仲村に引き立ててもらい、彼の編んだ論集—当時の社会学界にはその種のもの少なかった—で“書籍デビュー”できたので、この会は私にとって忘れがたいものである）。

¹⁴ 村上の依頼でまず鮎川がチームに入り、そのあと留学経験があって英語ができるだろうということで中河（当時はマートニアンであり、そのため指導教員の宝月から大村に里子に出されかけた（大村の指導を仰ぐようにいわれて阪大を訪れた）くらいだったのだが）が“手伝い”として加わったような気がするが、何分昔の話なので、細かい経緯については鮎川も私も記憶が定かでない。

¹⁵ ハーベスト社は印税なしという条件で、それに対してマルジュ社は原著者にだけでも印税を払ってくれるから、そちらにしようというのが村上の提案だった。しかし、刊行後も版元から印

あと一点、邦訳では著者名が「キツセとスペクター」と逆転してしまったのは、おそらく私と版元（校閲）のダブルミスの結果だ；細かい事情はもうわからないが、ラベリング論以来の論客で、しょっちゅう来日する（森とともにマルジュにも顔を出した）キツセの存在感が大きいので、ついキツセを先にした著者名を書いたのを、版元がそのまま通してしまったのだと思う¹⁶



田中正人編著『社会学用語図鑑』（プレジデント社 2019）より

3. キツセのレガシー

- 2018年9月の日本社会学理論学会の大会で、「機能主義の職業心理（occupational psychosis）に抗して—J・I・キツセのレガシーを振り返る」という報告をした；「構築主義論争」以降、理論家（方法論家）としてのキツセはいろいろミスをしたが、しかし、彼の機能主義批判の本旨は、今世紀の社会学のあり方について考えるとき、今なお有効だというのが、その趣旨である（ご関心を寄せてくださる方には、pdfの当日配布資料を送らせていただきますので、冒頭のメアドにご連絡ください）

SSSP（Society for the Study of Social Problems=米国社会問題学会）で報告するため向こうに行ったときなどに、お宅に泊めてもらい、腕自慢の料理でもてなしていただいた；

税の連絡がなく、村上が仲介の労を取る構えもなかったもので、ばか正直な中河が鬼の督促をし（出版関連作業で何度か訪れるうちにその内証が厳しいことは何となくわかってしまっていたのに）、一度だけキツセに送金させた。「こんなものでお金を儲ける気はないよ」、「いや、でも、夫婦でどこかで美味しいものが食べられたらいいじゃないですか」というのが、この件についてのキツセと私のやりとり。その後、現在に至るまで、マルジュ社からは、お金の話どころか一切連絡はない。おそらく、村上が印税の件を持ち出したことで『社会学の構築』日本版の装丁が重くなり価格設定が高くなったのだらうと思う。ハーベストで、印税なしで、より低い価格設定で売ることが出来ていれば、より多くの人に読んでもらえて、本にとっては幸せだったのではないかと思います。

¹⁶ なぜスペクターがこの本のシニアオーサーになったかについては、第6章「社会問題活動の記述と分析—経験的研究の具体例」のための調査をとてもがんばってくれたからだだと、キツセはいつていた。

窓の外で夜中に物真似鳥がさえずるすてきなコテージ風のお宅だった； お話好きの議論好きで、いろんなことを話した； が、していただいたことに対して、十分なお返しができなかったというやましさがある； ハウスパーティの座で、日本的な「恩」か何かの話をしているときに、ヴァレリー・ジェネス（プラチナブロンドのキマったファッションの研究者）が、「わかってるわ。“それって、自分が先生でおまえを教え育てたんだから、ちゃんとうやまうように“ということよね」といって、大笑いになった：

私はたぶんまだ、内観の身調べ流にいうなら、キツセに「恩」を返せていないと思う¹⁷

¹⁷ 私の姓、「中河」はじつは、日系移民経由の名字である。父が（母と生まれて間もない私を残して）1950年代の初めに米国へ留学したとき、シカゴでお世話になった帰米二世（親は山口県の周防大島から西海岸への移民、米国生まれで早稲田に学んで米国へ戻り、シアトルで日本人学校の校長をしていて、戦時のrelocationでシカゴに移った）の養子になり、親子そろってこの姓を名乗ることになったのだ。私がシカゴに留学したのも、その父の養父母の縁だ。「シカゴのおじいさん」が亡くなり、祖母が病んで日本の父に引き取られたあと、その住居や家作のアフターケアをする必要があったのだ。さらに、私が院生時代に最初にした翻訳は、ハワイの日系人家族についてのものであった（Johnson 1981, 細辻洋子と共訳）。何度も世間話をする機会があったのに、キツセには、たぶんどちらのことも話していない気がする（翻訳の原著者はカリフォルニア州立大学サンフランシスコ分校医学部助教授だったから、キツセが知っていた可能性もあったのに）。キツセとの縁は、義理の祖父を含む米国の日系人について関心を抱くよい機会だったのに、皮肉なことに、私の目はひたすら、米国のアフリカ系の人びとのほうを向いていた。それを知ったキツセは、私にマイルス・デイヴィスのCDや、戦前からの民俗音楽研究家アラン・ローマックスのメモワール *The Land Where the Blues Began* を送ってくれたり、UCSCの同僚でアフリカンアメリカン文化の研究者ハーマン・グレイ（ジャズのマイナーレーベルの研究で知られるが、社会問題の構築主義アプローチの立場から黒人音楽史を考察する論文も書いている； Gray 1989）を紹介してくれたりした。しかし、何かの学会の会場でグレイと会った私は、この人は中流（インテリ）の音楽であるジャズには詳しいかもしれないけど、アフリカンアメリカンのvernacularな音楽文化については、私のほうが詳しいなどと、不遜なことを考えてしまうのだった。キツセの日本社会と日本文化への興味についても、ロマン化がすぎる、今の若い人はもうそんなじゃないよと、生意気な口をきいて水をかけたりもした（キツセが「ヤマムラセンセイの茶室の素晴らしさ」について力を入れて語ったとき、私の反応はたぶんクールだった）。いま思うと、なんだかやましい。キツセの日本文化萌えと、私の黒人文化萌えの擦れ違い（私は米国のペンテコステ系黒人教会のフィールドワークを夢見ていたものの、キツセがやったほどのフィールドもできずに、ただ資料とコレクションの山に埋もれているだけなのだが）。留学生時代、折角日系人紙『羅府新報』が送られてくる家に暮らしたことがあるのに、日系人とその経験についてもっと語り合わなかったのは、いま思えばとても残念だ。

【コラム1】 ジョン・I・キツセの略年譜

John Itsuro Kitsuse: 25 August 1923, Imperial Valley, California, US – 27 November 2003, Santa Cruz, California, US



★『構築』日本版の刊行後の時期にシクレルのところ（UC サンディエゴ）に在外に行き、サンタクルーズのキツセ宅を訪れたことがある宝月誠が昔いったことばを引くなら、「古武士のような風格がある人だった」

○1923 鹿児島に近い宮崎県の都城からカリフォルニアへの移民の子息として誕生（日本名は「吉瀬逸郎」、島津家の家臣吉瀬家の流れを汲む？ 都城では政治家や実業家を出した家柄）； メキシコ国境近くの盆地インペリアル・ヴァレーで生まれたが、子どものときに家族がロサンジェルスに移住； 本人によれば、父とおじは日系人野球チーム（フレスノ野球団？ 祖父が野球団を作った？）の選手で、おそらく海外旅行を含む長距離の遠征試合にも参加したという

（幼いときに東京の縁ある人にもられる話があったが、親がいろいろ考えたすえ最終的に断ったのだとか； 「あのときに貰われていたら自分は日本人になっていたのだなあと思うと、不思議な気持ちがある」と、中河に語ったことがある）

○1942-43 日系二世だったため、家族とともにマンザナー強制収容所に1年間収容、兄は親の反対を押し切って軍に志願し、有名な日系人部隊第442連隊の一員となって戦死したという¹⁸； 収容所を出たあと病気になるが、友人たちの助けを得てマサチューセッツ州に移住、ボストン大学でBAを取得した

○1940年代後半～50年代前半 大学卒業後兵役に服したのち（戦争が終わった後にたぶん18ヶ月、赴任地は不明）、GIビル（復員兵援護法）でカリフォルニア大学ロサンジェルス校（UCLA）に入り、『社会学』（今田隆俊訳、ハーベスト社、1987）の訳書があるレオナード・ブルーム（Leonard Broom）の指導の下に修士号と博士号を取得（Sheldon Messinger, Scott Bellらと同じく、新設のUCLAの社会学の博士課程修了者の第一世代）

（1953年に学部の授業のTAだったキツセは、新入の院生シクレルと知りあい半世紀にわたるアカデ

¹⁸ キツセは、マンザナーの経験についてはあまり語らなかったが、収容は17、8のときのことで、夜に突然係官（？）が家にやってきて、そのまま収容所に連れて行かれたので驚いたこと。また、収容が終わって出て行っていいといわれたときも、財産を没収され家業を失い行くところがないといって、当面収容所に残った人がかなりの数いたことなどを回顧して話したことがあったという（森俊太の第二報告による）。

ミックな付き合いが始まる＝二人は、Donald Cressey, Edwin Lemert, P. S. Robinson, Phillip Selznick, Ralph Turner の講義を受けている： Cicourel 2008)

(在学中に、1954年にUCLAに来たガーフィンの講義を受けたことがある可能性あり、少なくとも院生仲間の友人—たとえばシクレル—から講義について「耳学問」していたことは、後にキツセからガーフィンの講義ノートを提供されたというジャック・カツの回顧(Katz 2009)からもたしかだろう)

○1956 以前からそのテーマの研究をしていた師ブルームと共著で、戦時下の日系人家族のケーススタディ、『不慮の災難への対処』(*The Managed Casualty: The Japanese-American Family in World War II*, University of California Press)を刊行(同書は、政府の調査機関の紐つきではない、アカデミックな日系人研究の最初期のものとして評価されている←2016年に電子書籍化)

○1950年代後半 ワシントン大学、サンディエゴ州立大学で教えたあと、1958年春にシカゴのノースウェスタン大学の教授に(シクレルも同時に同大の教員になったが彼は2年で転出; また、ハワード・ベッカーと同僚になり親しく付きあうようになる; さらにいえば、のちに共同研究者になるマルコム・スペクターはこのノースウェスタン大時代の教え子)

西海岸時代かノースウェスタン時代の早い時期に、コーカソイドでたぶん本に関わる仕事(図書館員? 書店員?)をしていた Kathy (Katherine)さんと結婚

○1961,10~62,8 フルブライトプログラムの日本派遣研究員として訪日、少年刑務所での内観法の応用について山村賢明と共同研究、その成果の一部は、論文「現代日本における個人的責任の意識」として公刊(キツセ, 山村, 1963)

○1962 論文「逸脱行動への反作用」("Societal Reaction to Deviant Behavior: Problems of Theory and Method")

○1963 アーロン・シクレルとの共著論文「公式統計の使用についての一考察」("A Note on the Uses of Official Statistics"); 以上の二論文で、キツセは、ハワード・ベッカー、カイ・T・エリクソンと並ぶいわゆるラベリング論(キツセ自身は「社会的反作用アプローチ」と呼んだが)の提唱者三羽鳥の一人と目されることに

○1963 アーロン・シクレルと共著の『だれが進学を決定するか』を刊行(*Educational Decision Makers*, Cicourel and Kitsuse 1963=1985)★本書は、半世紀後の2012年に再刊されている!

○1965 *Psychologia* (=心理学国際誌、心理学会刊行) vol.8に、「日本の刑務所における受刑者の道徳的処遇と更生」("Moral Treatment and Reformation of Inmates in Japanese Prisons")を寄稿

○1973 マルコム・スペクターをシニアオーサーとする共著論文「社会問題の再定式化」("Social Problems: A Re-Formulation")を発表、社会問題への構築主義アプローチの方法論の整備作業を開始する(当初二人はそれを、「社会的定義アプローチ」と呼んだ; ちなみに、同時期にこのアプローチの形成に貢献したキツセ/スペクター以外の主要な論者として、ハーバート・ブルーマー、ジョーゼフ・ガスフィールド、そして医療化論のピーター・コンラッドとジョーゼフ・シュナイダーらが挙げられる)

○1974 カリフォルニア大学サンタクルーズ校 (UCSC) の教授に (のちに社会学科長などの要職にも)

森によれば、同キャンパスの社会学科は、ネオマルキシズムなど左派系が主流で、キツセは、アフターマティヴアクション的発想 (暗黙裏) による新設の「アジア人枠」によって、同学科に入ったのだという (なので、同学科を退くとき、その枠を守ろうと頑張っ、後任に Hiroshi Fukurai 氏—社会学と法学にわたる領域で研究し、児童虐待事件の裁判についての共著書の邦訳あり Butler et. al. 2001=2004—をとったと語っていたという¹⁹ ; そうしたネオマルキストやフェミニストが主流かつ学生に人気の学科構成だったからか、キツセはむしろ、Elliot Aronson や Theodore Sarbin など、社会心理学者たちのほうと仲良くしていたという=森俊太談)

○1975 ゴーヴが編んだラベリング論への実証主義的批判の書、『逸脱のラベリング』(Gove (ed.), *The Labelling of Deviance*) に『『逸脱の新概念』とその批判者 (The “New Conception of Deviance” and Its Critics)』を寄稿、「(公的な社会統制活動のバイプロダクトとしての) ラベリングは逸脱を促進するか、抑止するか」という同書における議論の土俵の設定は、社会的反作用アプローチが研究しようとする現象とは別種の事柄だと論じた

○1977 社会問題への構築主義アプローチの教科書『社会問題の構築』(Spector and Kitsuse 1977=1990) を刊行、従来の機能主義的な社会問題研究を方法論的に批判したのち、クレイム申し立て活動を研究対象とする新しい社会問題の調査研究のやり方を提案、事例研究の例を示すとともに、そのアプローチに沿った社会問題の社会学の授業のやり方を提案した

○1978-1979 アメリカ社会問題学会会長 (会長就任スピーチのタイトルは、<あらゆる所からカムアウト(“Coming Out All Over: Deviants and the Politics of Social Problems,” 1979 Presidential Address, SSSP, *Social Problems* 28:1-13)」、 「三次的逸脱」概念を提示>

○1979 日本犯罪社会学会第6回大会 (於重細重大学) で、”Some Problems in the Labelling Perspective on Deviance”という題の特別講演を行う (通訳は山村賢明氏)

○1982 ごろ つくば大学の院でレクチャー (北澤毅、瀬戸知也、古賀正義らが受講)、その後も上智大や立教大などで何度もレクチャーした

○1984 シュナイダーと共編の『社会問題の社会学の研究』(Schneider and Kitsuse, *Studies in the Sociology of Social Problems*) に、モノグラフ論文「帰国子女—日本における教育問題の創発と制度化」(アン・村瀬、山村賢明と共著) を寄稿 (Anne Elizabeth Murase は上智大学の教育学の研究者で、彼女の「Japan Times」へのこのテーマの寄稿を目にとめたキツセがアプローチして協同で、日本でかなり政策決定過程に食い込んだ—つまり書けないことも多い—調査を行い、「臨教審だより No.32」に共著で「日本の国際化への衝動」という一文を寄せている)

○1985 『だれが進学を決定するか』の邦訳、山村賢明・瀬戸知也訳で刊行 (金子書房)

○1989 ベスト編の『問題のイメージ』(*Images of Issues*, Aldine de Gruyter) の、キツセ

¹⁹ ただし、UCSC には、日系のたぶん三世でパークレー出身、キツセと研究関心が近いテーマで構築主義的な観点も加味された *The Retreat from Race: Asian American Admissions and Racial Politics* の著者、ダナ・タカギがいる。彼女は別学科の教員?

とシュナイダーによるまえがきとベストによるあとがきで、構築主義陣営内のいわゆる厳格派とコンテクスト派（これはベストの区分と命名）の分岐が顕在化（『社会問題』誌上に掲載されたスティーヴ・ウールガーとドロシー・ポーラッチの1985年の論文「オントロジカル・ゲリマンダリング」とその続編（Woolgar and Pawluch 1985a,b）における構築主義批判にどう対応するかをめぐっての分岐）

○1990 『社会問題の構築』の邦訳，村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳で刊行（マルジュ社）

○1991 サンタクルーズ校を退職，名誉教授に（研究室は保持，テニスを楽しみつつ随時院生指導等を行う； おそらくこの前後，中河に日本の内観の現状を尋ね資料集めを依頼，再度の調査のための研究奨励金をとることを試みたようだが，そのプランは実現しなかった）

なお，UCSCの大学院では「娼婦の組合」の研究で知られる Valerie Jenness や，Peter Ibarra，森俊太をはじめ，幾人もの研究者を育てた

（この年，大庭（上智出身でキツセに会って話をしたこともある）らによる社会問題の構築主義を紹介するこの国初のジャーナル論文が刊行された（大庭・中根 1991））

○1993 時期的にいつてキツセの退官記念論集にあたる『社会構築主義再考』（Holstein and Miller 1993）に，ウールガーとポーラッチの批判に応える新たな研究プログラムを提案するピーター・イバラとの共著論文「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素」（Ibarra and Kitsuse 1993=2000）を寄稿； 同書の収録論文のほとんどがこの論文にコメントする形で書かれたため，いわゆる「構築主義論争」の主要著作の一つに

○90年代前半 犯罪社会学会の研究活動補助費を受けて，東京のどこかの大学（國學院？ 東洋大？）で社会問題への構築主義アプローチについてのキツセの講演が行われ，大庭絵里が通訳（ちなみに，大庭の記憶によれば，フロアにいた中河がキツセが語った内容を不穏当な表現で敷衍，当時の犯罪社会学会長星野周弘を怒らせたという）

○1994 UCSCの同僚だった社会心理学者サービンとの共編の論集，『社会的なものの構築』刊行（Sarbin and Kitsuse 1994）

○1990年代 鮎川潤の『少年非行の社会学』（1994），中河の『社会問題の社会学』（1999）など構築主義アプローチの論文や著作が登場するように； 山村氏や都城の親戚と行き来があるキツセは，おそらく調査も兼ねて，90年代の後半に卒中で倒れるまでは何度も来日，東京ではアジア会館が定宿だった）

○2001 『社会問題の構築』の新版刊行（Transaction）（キツセは，この間の論争を受けての大幅な改稿を希望していたが，右手の不自由およびたぶん適当な共同作業者に恵まれなかったため，新版のための序4頁を加えるのみの再刊になった）

○2002 8月のアメリカ社会問題学会の大会（at W Chicago City Center, Chicago）で，キツセの功績を顕彰する理論部会主催のシンポジウムがあり，キツセ本人やシュナイダー，ホルスタインらと並んで，大学教員をやめて弁護士になっていたスペクターも登壇し回顧談を語った（スペクターは，イタリア（ベネチア？）の研究職にアプライした美術史専攻のお連れ合いと同

行するためにカナダのマギル大学を辞して渡欧（一時, Institut de Criminologie. Universitg de Paris, II に在籍), その後離婚してニューヨークに戻り, ロースクールに入り弁護士資格を取得, 以前から希望していたホームレスの人たちをサポートする活動の一環として, かれらの法律相談をする弁護士事務所を立ち上げた; 1994 年の夏, 中河は『構築』の邦訳を渡すためにニューヨークに行き, スペクターのボランティア活動の現場を見ている ⇒ いまもオフィスはあるはずなので, コンタクトしたい方は, Malcolm B. Spector (Legal Services For The Elderly Poor) - New York, NY, 130 W 42nd St 17th Fl, New York, NY 10036- 7901 (212)-391-0120 へ)

○2002,9 旧友山村賢明氏逝去

○2003 卒中の後遺症の右半身麻痺のため長年車椅子で, リハビリをしつつの暮らしたが, 11 月 27 日に前日の卒中の発作のために自宅で逝去

○2004,5,8 UCSC の Arborteum で, 友人や同僚が集まった A Tribute to John Kitsue 開催 (付き合いがあったワトソンヴィルの和太鼓グループが演奏, 日本からは鮎川潤が出席したという)

★キツセは, 学校での進路指導を調べたシクレルとの共同研究にも示されるように「カテゴリーの使用」に焦点を合わせるとはいえ, 基本的には, インタビューを伴う自然主義的観察 (naturalistic observation) によって人びとや組織のフィールドワークを行う, オーソドックスなタイプの調査研究者だった (「新しいフィールドに入ったら最低一月は, インタビュー等の能動的な調査活動はせず, その場で起こっていることをじっと観察する。そうするとその場で起こっていることがだんだん見えてくるようになる」と, 筆者は教示された)

★★共同研究が多いチームプレイヤー; 共同執筆では, きわめてしばしば後輩や教え子にシニアオーサーをゆずった²⁰

★★★日系二世に特徴的な (ちなみにたぶん初等段階の母語保持教育を受けたが読み書きは習わず, そのことを残念がっていた), 明確な米国人としての自己認識と, 日本の文化と社会へのロマンティックな (ごめんなさい) 思い入れを併せ持つ人だった; 日系の一世はまっすぐな bamboo, 二世は banana, 三世は bee (ブラックパワーとイエローパワーのまだら模様で刺す針を持つ) という言い回しがあるそうだが, これはキツセにも該当すると思う, しかし二世には二世なりのアンビバレンスがあったはず (親の反対を押し切って二世部隊に志願したお兄さん

²⁰ 友だちが多く, 人を育てること (教育や共同研究の中での討論) と同時にパーティも好きで (ダニエルズのことばを借りるなら “人生のグルメ bon vivant”), さらに冗談が大好きな人だった。「私が実物のジョンと最初に出会ったのは, バークレーのメッシンジャーの家での, 午後のパーティのときだった。ジョンは (それはジョンとシェリー [メッシンジャー] の長時間にわたる冗談の一部だったとあとで教えられたのだが), 白のジャケットを着こんで, アジア系の^{ハウスボーイ}下男のステレオタイプといった仕様で飲み物を給仕していた。ジョンもシェリーも, それがとても可笑しいことだと思っていた。当節ではこの種の冗談は許されないが, あの無垢な時代には, それはジョンがやってみる気になるほど可笑しいネタなのだった。」(Becker 2009: 22) 衣装といえば, 後年, キツセ家の庭でベッカーを公証人として行われたキツセの娘さんの結婚式にキツセは, 完全装備のサムライの服装をして, そういう物腰と仕草で登場したとのことだ(あるいは, ただの紋付き袴をベッカーがそう勘違いしたのかもしれないが) (同 24)。

について、また、「自分は米国人だ」という心情をかれらと共有しつつ、であるからこそ国の不当で非合法的な取り扱いを批判して米国への忠誠宣誓をしなかった”no no boy”たちについて、十代の彼はどんなふうを感じたのか、ご存命のうちにかがっておけばよかった) ²¹



1994年に名古屋・相山女学園大学での日本社会学会大会に参加したキツセ氏

【参照文献】

鮎川潤 1994 『少年非行の社会学』 世界思想社.

Becker, Howard S., 1963, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, Free Press (村上直之訳 『アウトサイダーズ—ラベリング理論とは何か』 新泉社 1978).

-----, 2009, "John Kitsuse: a Colleague Remembered," *American Sociologist* 40: 21-24.

Best, Joel, 1989, "Afterward," Pp.243-253 in *Images of Issues: Typifying Contemporary Social Problems*, edited by Joel Best, Hawthorne, NY: Aldine de Gruyter.

Broom, Leonard and John I. Kitsuse, 1956, *The Managed Casualty: The Japanese-American Family in World War II*, Berkley: University of California Press.

Butler, Edgar, Hiroshi Fukurai, Jo-Ellan Dimitruis, and Richard Krooth, 2001, *Anatomy of the McMartin Child Molestation Case*, University Press of America (黒沢香・庭山英雄訳 『マクマーチン裁判の深層—全米史上最長の子どもの性的虐待事件裁判』 北大路書房 2004).

Cicourel, Aaron V., 2009, "Working with John I. Kitsuse," *American Sociologist* 40: 29-32.

Cicourel, Aaron V., John I. Kitsuse, 1963, *The Educational Decision Makers*, New York: Bobbs-Merrill (山村賢明・瀬戸知也訳 『だれが進学を決定するか』 金子書房 1985).

土居健郎 1956 「甘えること」 『愛育心理』 第75号.

Daniels, Arlen Kaplan, 2009, "A Toast to John Kitsuse," *American Sociologist* 40: 25-28.

Grey, Herman, 1989, "Popular Music as a Social Problem," Pp.143-158 in *Images of Issues:*

²¹ そうしたことの理解の歴史的な文脈となる日系人の強制収容とその名誉回復と補償を求める運動については、たとえば、岡本 (2003) がコンパクトで便利だ。

- Typifying Contemporary Social Problems*, edited by Joel Best, Hawthorne, NY: Aldine de Gruyter.
- Gove, Walter R.(ed.), 1975, *The Labelling of Deviance: Evaluating a Perspective*, New York: Halsted.
- Holstein, James A., and Gale Miller (eds.), 1993, *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*, New York, Aldine de Gruyter.
- Ibarra, Peter R., and John I. Kitsuse, 1993, "Vernacular Constituents of Moral Discourse: An Interactionist Proposal for the Study of Social Problems," Pp.25-58 in *Reconsidering Social Constructionism*, edited by James A. Holstein and Gale Miller, New York: Aldine de Gruyter (中河伸俊訳「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素—相互作用論の立場からの社会問題研究のための一提案」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学—論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社 46-104 頁 2000).
- Johnson, Colleen L. (中河伸俊, 細辻洋子訳), 1981, 「ハワイの日系アメリカ人家族」『共同研究 日本の家』国書刊行会 1981年3月 375-406 頁.
- Katz, Jack, 2009, "John Kitsuse: A Sociologist in Everyday Life," *American Sociologist* 40: 36-37.
- Kitsuse, John I., 1962, "Societal Reaction to Deviant Behavior: Problems of Theory and Method," *Social Problems*, 9: 247-256.
- , 1965, "Moral Treatment and Reformation of Inmates in Japanese Prisons," *Psychologia*, 14: 9-23.
- , 1979, "Coming Out All Over: Deviants and the Politics of Social Problems," *Social Problems* 28:1-13.
- Kitsuse, John I., and Aaron Cicourel, 1963, "A Note on the Uses of Official Statistics," *Social Problems*, 11: 131-139.
- Kitsuse, John I., and Joseph W. Schneider, 1989, "Preface," Pp. xi-xiii in *Images of Issues: Typifying Contemporary Social Problems*, edited by Joel Best, Hawthorne, NY: Aldine de Gruyter.
- キッセ, ジョン I., 山村賢明 1963 「現代日本における個人的責任の意識」『社会学評論』14 卷1号, 79-90.
- Merton, Robert K., 1957, *Social Theory and Social Structure*, Free Press (Originally published in 1949 ; 森東吾他訳『社会理論と社会構造』みすず書房 1961).
- Merton, Robert K., and Robert A. Nisbet, 1966, *Contemporary Social Problems (2d ed.)*, New York : Harcourt, Brace & World.
- 村上直之 1979 「非行少年処遇問題への一視点——脱ラベリングの可能性をめぐって」『犯罪社会学研究』4: 121~138.
- 中河伸俊 1999 『社会問題の社会学—構築主義アプローチの新展開』世界思想社.

- 大庭絵里, 中根光敏 1991 「社会問題の社会学の構築をめざして」『ソシオロジ』36 卷 2 号 71-86.
- 大村英昭, 宝月誠 1979 『逸脱の社会学—烙印の構図とアノミー』新曜社.
- 岡本智周 2003 「在米日系人強制収容に対する補償法の変遷—アメリカの国民概念に関する一考察」『社会学評論』54 卷 2 号 144-158.
- Sarbin, Theodore R., and John I. Kitsuse (eds.), 1994, *Constructing the Social*, London: Sage.
- Spector, Malcolm B., 1976, "Labeling Theory in *Social Problems*: A Young Journal Launches a New Theory," *Social Problems*, 24: 69-75.
- Spector, Malcolm B. and J. I. Kitsuse, 1973, "Social Problems: A Re-formulation." *Social Problems*, 21: 145-159.
- Schneider, Joseph, and John I. Kitsuse (eds.), 1984, *Studies in the Sociology of Social Problems*, Norwood, NJ: Ablex.
- Spector, Malcolm, and John I. Kitsuse, 1977, *Constructing Social Problems*, Menlo Park, CA: Cummings (村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳『社会問題の構築—ラベリング理論をこえて』マルジュ社 1990).
- Takagi, Dana, 1998, *The Retreat from Race: Asian American Admissions and Racial Politics*, Rutgers University Press.
- 山村賢明 1971 『日本人と母—文化としての母の観念についての研究』東洋館出版社.
- 吉本伊信 1989 『内観法—四十年の歩み (新装版)』春秋社.
 ----- 2007 『内観法』春秋社.
- Whiteford, Scott W., 2007, *The Adolescent Drug-crime Relationship: Desistence and Gateway Theories Across User Levels*, Lfb Scholarly Pub Llc.
- Woolgar, Steve(ed.), 1993, *Knowledge and Reflexivity: New Frontiers in the Sociology of Knowledge*, London: Sage.
- Woolgar, Steve, and Dorothy Pawluch, 1985a, "Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problems Explanations", *Social Problems* 32: 214-227 (平英美訳「オントロジカル・ゲリマンダリング—社会問題をめぐる説明の解剖学」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学—論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社 18-45 頁 2000).
- 1985b, "How Shall We Move Beyond Constructionism?" *Social Problems* 33: 159-162.

- この報告を行ったシンポジウムのフライヤーより：

構築主義を再構築するプロジェクト・特別シンポジウム
内観療法から『社会問題の構築』と『日本人と母』へ
——キツセ・山村の学的交流と交情を振り返る——
2019年10月27日（日）13:00—17:00
東京大学本郷キャンパス・山上会館本館 001 会議室
(https://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_00_02_j.html)

逸脱のラベリング論や社会問題への構築主義アプローチの基礎を築いたジョン・イツロウ・キツセ氏（1923-2003）と、その日本への受容に貢献するとともに独自の文化社会学を作り上げた山村賢明氏（1933-2002）の学的交流および交情の経緯を振り返るとともに、その功績を顕彰するシンポジウムを、下記の要領で開催します。参加は無料です。奮ってご参加ください。

【報告】

1. 少年刑務所での内観実践の共同研究から『社会問題の構築』の日本版へ
中河伸俊（関西大学）
2. Constructing Social Problems の翻訳と帰国子女研究 サンタクルズでのキツセ教授（仮）
森俊太（静岡文化芸術大学）
3. 日本の教育社会学への構築主義の導入と権力性問題
古賀正義（中央大学）
4. 総括討論
北澤毅（立教大学）

【司会】 赤川学（東京大学）
【主催】 構築主義を再構築するプロジェクト（代表・中河伸俊）
【共催】 質的調査連絡会（代表・赤川学）、科学研究費補助金基盤研究（B）課題番号18H00990『学校的社会化の理論的・経験的研究—「児童になる」論理と実践の教育社会学的探究』（研究代表・北澤毅）